

「茶旅」

”こぼればなし”

(37)

ベトナム 高山茶の生産に 変化が

コラムニスト 須賀 努



実は2017年という年は台湾にいくことが多かった。そして台湾高山茶の茶摘みを見学すると、摘み手としてバイクに乗って山を登るベトナム人を大勢見た。台湾内には相当数のベトナム人が住み、農業などに従事している。事実はこちらと衝突だった。そんな体験から久しぶりにベトナムへ行ってみた。

ベトナムは南北に細長い。北と南では文化も茶も違ってくる。前回は北部の茶畑を訪ねたが、今回はフランス統治時代の避暑地として有名なダラットへ向かった。ダラットでは1920年頃からフランスが茶樹を植え、紅茶を製造して輸出した歴史があると聞いたが、フランスが去った後、茶業は廃れていたらしい。

ナムの物件費が上昇していることも経営を圧迫する要因になっている。ダラットからやはり車で30分ほどのガウダットの茶工場にも行ってみた。こちらも20年前から台湾人の韓汝錫さんが茶を作っている。標高1600mの環境は前述の呉さんのところよりもさらに良い。土壌も茶作りに適している。フランス時代に植えられた大葉種の茶樹も残っている。

ここで作られているのはいわゆる台湾高山茶。品種はこの地に適している、台湾から持ち込まれた金萱が中心。茶畑も茶葉も台湾高山茶とさほど変わらない。この茶葉がほぼ全量台湾へ輸出され、台湾の高山茶とブレンドされていたという。ブレンド用なので、ここで焙煎される茶葉は多くない。尚従業員は中部から来る出稼ぎ者が中心で、その人件費は高くなってきているという。韓さんも元々は茶業者ではなかった。台中でミシンを販売しており日本企業との付き合いもあったが、茶業関

実は8年ほど前に一度ダラット近くのバオロックという地域の茶畑を見に来たことがあったが、付近にはいくつかの台湾人経営の茶園があり、台湾とまるで同じような茶畑、台湾の中古設備を備えた茶工場があり、そこで烏龍茶が作られていたとの記憶がある。

今回はダラット近郊の2つの茶工場を訪ねた。1つ目はダラット空港から車で1時間ほどかかるナンバンという場所にあった。そこへ行くにはデコボコの1本道、周囲はコーヒー畑であり、茶工場はそこ1つだけだった。このオーナーもやはり台湾人、呉佳煌さん。標高1100mのこの地で呉さんは20年前から茶を作っているという。しかし台湾時代は台南で火鍋屋を経営し

係の仲間に誘われて、ここへやって来た。そしてこの環境が気に入って住み着いた。奥さんもホーチミン出身のベトナム華人で、その兄弟と茶作りを一緒に行っており、地元で溶け込んでいるのは呉さんと同じ。如何にも華僑らしい。

しかし前述の通り、台湾での高山茶需要に陰りが見えた現在、韓さんは茶

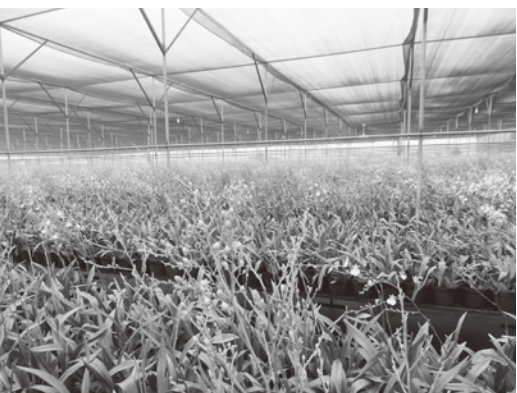


写真:ガウダット 茶畑の横にある花農園

ていたというから、お茶とは無縁だった。ベトナムに来てから茶作りを勉強し、当初は台湾の茶師を招き、苦勞を重ねて品質を高めてきた。呉さんは常に茶のことを考えており、当日も従業員が沢山いる中、ほぼ徹夜で茶作りをしていた。奥さんは当地のベトナム華人(客家)。現地での面倒なことは地元民である奥さんの家族に任せているようだ。

作られた茶は元々台湾内に還元されており、その後中国へも輸出されている。最近では少しずつではあるがベトナム国内にも高級烏龍茶の需要が出てきている。だが台湾におけるベトナム産烏龍茶需要が落ち込み、近年は飲料茶の原料を機械摘みで作るようになっていく。これは台湾への還流もあるが、ベトナムやアセアンでの飲料茶需要増への対応であるらしい。実際訪ねた時は日本製の中古茶刈り機を使い、茶摘みが行われていた。

茶価は上がらず、昔は安かったベトナム

業から花栽培への転換を図ろうとしている。今回の訪問では茶畑も見したが、より多くの時間は増設された花農園の見学に当てられた。実は近所に住む同じ台湾人の張さんが花栽培で成功しており、それを手本に百合や胡蝶蘭の栽培が進んでいた。

ベトナム国内の所得向上により、元々花好きのベトナム人の購買意欲が高まっていることも後押ししている。『台湾に輸出して色々と言われるお茶よりも、ベトナム国内消費に当てられる花の方が将来性は高い』というのも頷ける。台湾では、多くのベトナム産高山茶を輸入しているが、農業が多く使用されているなどとされ、その風当たりは強い。

これからのベトナム茶業の方向性を決めるのは台湾の動向なのか、ベトナム国内の事情なのか。少なくともダラット近郊では花や高原野菜の栽培がコーヒーや茶に取って代わり、主流になりつつある現状がある。(すが つとむ)